8. 脳血流SPECTが診断の契機となった左内頸動脈閉塞症の1例

水野　晋二　後藤　裕夫　星　博昭
（岐阜大・放）
奥村　歩　坂井　昇　（同・脳外）
鈴木　幸二　（同・二内）

症例：68歳男性．主訴：右半身の脱力．既往歴に狭心症ありCABG施行されている．頭部MRIにて左側頭葉内側部に血管支配と無関係で不整なT2高信号が認められ，炎症や腫瘍が疑われた．同日施行されたHMPAO SPECTにおいては同部位の欠損と左半球全体の血流が低下していた．以上よりMRI上の異常所見は脳梗塞部であることが最も疑われ，MRAが施行され左内頸動脈閉塞が認められた．20日後のMRIではfogging effectがみられ，同時期のSPECTにて病変部への血流が相対的に上昇しておりEPI-DWIにより高信号は認められなかった．以上，MRI上稀な所見を呈し脳血流SPECTとEPI-DWIにより経過を観察した左内頸動脈閉塞症を報告した．

9. ^{99m}Tc-ECD SPECTによるジョゼフ病の脳血流定量的評価

松村　要　中島　弘道　竹田　寛
中川　毅　（三重大・放）
加藤　保司　成田　有吾　葛原　茂樹
（同・神内）

遺伝子解析にて診断したジョゼフ病8名の局所脳血流量を^{99m}Tc-ECD脳血流シンチにより計測した．ECD (740 MBq) を投与し，ガンマカメラにて頭部，胸部正面動態画像を撮像，大動脈弓を入力してPatlak plot法により平均脳血流量を計算，さらにSPECTを行い，局所脳血流量 (ml/min/100 g) を求めた．ジョゼフ病の大脳皮質血流量は58±11であり，正常群 (59±11, n＝20) と有意差を認めなかった．小脳血流量は63±16であり，正常群 (72±19) と有意差を認めなかったが，橋の血流量は26±6と，正常群 (42±8) に比して有意の低下が見られた ($p<0.001$)．この結果は本症の特徴とされる橋でのより強い病理学的変化を反映すると思われた．

10. 一酸化炭素中毒症において急性期に脳血流SPECTを施行した2症例の報告

市川　聡裕　久慈　一英　絹谷　啓子
隅屋　寿　利波　紀久　（金沢大・核）
東　滋　久田　欣一　（北陸中央病院）

一酸化炭素中毒症において急性期に脳血流SPECTを施行し，経時的に経過観察し得た2症例について報告する．症例は24歳男性，および79歳女性．来院時の意識レベルはそれぞれJCS II-30, III-300であった．頭部CT, MRIにては明らかな異常を認めなかった．来院3日後^{99m}Tc-ECDによる脳血流SPECTを施行した．パトラックプロット法により血流値を算出，それぞれ60 ml/100 g/min，59 ml/100 g/minと非常に高値を示した．その後2人とも10日後にてやや増加，20日後にて減少，52日後にては再び増加を示した．発症2週間目頃より頭痛，立ち眩み，吐き気などの軽度の遅発性の変化が認められたが，この時期の脳血流の低下は何らかの関与が推定された．また慢性期において比較的高値が持続しており初期の高値とあわせて一酸化炭素中毒症の病態との関与が考えられた．

11. 臨床的ライ症候群の一例におけるBrain SPECT

渡辺　直人　清水　正司　呉　翼偉
豊嶋心一郎　蔭山　昌成　野口　京
瀬戸　光　（富山医薬大・放）
本郷　和久　小西　徹　（同・小児）

症例は1歳7か月の男児で，主訴は意識障害と痙攣であった．間代性痙攣のため当院に入院した．肝機能障害および脳症がみられCDCの診断基準によりライ症候群と診断された．入院時CTでは右半球に広範なlow density areaを認めた．MRIのT2では皮質にそうhigh intensity areaが右半球広範にまた左前頭葉頭頂葉にみられた．SPECTでは右半球広範および左前頭葉頭頂葉に血流増加が認められた．その後症状は軽快し1か月後に退院した．約2か月後のMRIでは両側半球は萎縮傾向が認められた．同時期のSPECTでは右半球広範な血流低下および左前頭葉頭頂葉の血流低下を認めた．今回SPECTを用いてライ症候群の中枢神経の評価を試み，CT，MRIと比較し

Presented by Medical*Online